

『幻の村』

2021年10月14日

私は1941年、旧満州の大連市で生まれた。そのためか、満州に関わることに興味を引かれる。野田正彰氏の『戦争と罪責』を読んで、衝撃を受けた。日本兵が中国で残虐行為をした事実が、精神医学者の目から、克明に描かれている。その後、中国帰還者連絡会の人々が中国で行った残虐行為の告白を、機関紙から聞き続けた。彼らの誠実な告白に驚愕した。また、森村誠一氏の『悪魔の飽食』から、731細菌戦部隊の実態を知らされた。日本軍は、皇軍と称して、戦争に勝利するために、許されない犯罪行為を臆面なく重ねてきたのである。私が満州で生まれたことは、これらと無関係だとは思えない。特別豊かな生活でもなく、中国人を直接いじめた訳でもないが、彼らの国で、日本人であることを謳歌していたのだから、中国侵略者の末裔であることに間違いない。そして、中国残留孤児問題がクローズアップされた時、私と同年代の人々が経験したことなので、勢い興味を引かれた。彼らを生み出したのは、「満州開拓団」と多く関係している。西田勝・孫継武・鄭敏の三氏が編集した『中国農民が証す「満州開拓」の実相』に、中国人に対する理不尽な行為と開拓団の人々の受けた悲劇が報告されている。日本の植民地と化した満州で、中国人をはじめ、日本人も耐え難い苦悩の中で、慟哭の涙が流されている。

今年の7月、信越放送のディレクターの手塚孝典氏が、長野県内で、満州移民だった高齢者に取材を重ね『幻の村－哀史・満蒙開拓』というルポルタージュを上梓している。改めて、開拓農民と残留孤児と残留婦人が経験した生と死の苦闘に胸を詰まらせながら読んだ。

日本政府は1932年に「満州国」という傀儡国家を作った。この国に、日本から移民を送り込み、食料を増産しようとした。この時、王道楽土、五族協和と言って、移民を募った。王道楽土については「人類は必ず仁愛を重んぜよ。…今、我が国を立つ、道徳仁愛を以て主となし、種族の見、国際の争いを除去せん。王道楽土まさにこれを実見に見るべし」、五族協和については「凡そ新国家領土内に在りて居住する者は皆、種族の岐視、尊卑の分別なし。現有の漢族、満族、蒙族および日本、朝鮮の各族…長久に居留を願う者もまた平等の待遇をうくることを得。そのまさに得べき権利を保障し、それをして糸毫も侵損あらしめず」と謳っている。悪いことをする時は、美しい言葉を使うものだと感心させられる。中国農民から、ただ同然で奪い取った土地に、日本人を移民させ、当初は、豊かな土地で、中国人を農奴のようにこき使い、実りが豊かにあったらしい。しかし、開拓団を守るべき関東軍は南方に送られ、成人男子は徴兵に取られ、老人と女性と子どもだけになった。敗戦を迎え、中国人から略奪され、参戦してきたソ連兵から残酷な仕打ちを受けた。我が子を殺す集団自決、何百キロの逃避行、飢えと寒さと疫病で次々と死んでいった。歩けなくなった人が「連れて行ってくれや」と懇願しても、顧みることができない。足手まといになると、冷たい川に自ら身を投じる老婦人もいた。地獄の様相であったと証言している。27万人の開拓団員が送り込まれたが、8万人以上が亡くなった。この逃避行の中、中国人と結婚した女性が残留婦人、死ぬよりはと預けられ、また、捨てられた子どもたちが残留孤児になった。彼らの苦労は、山崎豊子氏の『大地の子』に描かれている。長野県に帰国し、高齢になられた人が毎朝6時に、亡くなった仲間のために読経を欠かさない。そして、「誰が私たちを中国に送ったんですか。何のために送ったんですか。私たちを苦しめ、中国人を苦しめ、何のための戦争だったんですかね。何をやっているんだという怒りがこみ上げます」と言う。これは、一重に日本の植民地政策がもたらした罪業である。互いに加害者、被害者にならないために、権力を見守る責務があると訴えている。